

9/18 Sat.

第240回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.240 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

9/19 Sun.

第240回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.240 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Conductor
オルガン
Organ
コンサートマスター
Concertmaster

C. P. E. バッハ
C. P. E. BACH

プーランク
POULENC

[休憩]
[Intermission]

メンデルスゾーン
MENDELSSOHN

鈴木雅明 *-p.5*
MASAAKI SUZUKI

鈴木優人 *-p.8*
MASATO SUZUKI

小森谷 巧
TAKUMI KOMORIYA

シンフォニア ニ長調 Wq.183/1 [約11分] *-p.10*
Sinfonia in D major, Wq.183/1
I. Allegro di molto
II. Largo – III. Presto

オルガン協奏曲 ト短調 [約24分] *-p.11*
Organ Concerto in G minor
I. Andante – Allegro giocoso – II. Andante moderato –
III. Tempo allegro, molto agitato – Lent – Allegro – Largo

交響曲 第4番 イ長調 作品90 〈イタリア〉 [約27分] *-p.12*
Symphony No. 4 in A major, op. 90 "Italian"
I. Allegro vivace
II. Andante con moto
III. Con moto moderato
IV. Saltarello : Presto

※当初の発表から出演者および曲目の一部が変更されました。

9/24 Fri.

第645回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.645 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor
ソプラノ
Soprano
コンサートマスター
Concertmaster

ハイドン
HAYDN

[休憩]
[Intermission]

マーラー
MAHLER

高関 健 *-p.6*
KEN TAKASEKI

中江早希 *-p.8*
SAKI NAKAE
長原幸太
KOTA NAGAHARA

交響曲 第22番 変ホ長調 〈哲学者〉 [約16分] *-p.14*
Symphony No.22 in E flat major "The Philosopher"
I. Adagio
II. Presto
III. Menuetto
IV. Presto

交響曲 第4番 ト長調
〈大いなる喜びへの賛歌〉 [約55分] *-p.15*
Symphony No. 4 in G major
I. Bedächtig, nicht eilen
II. In gemächlicher Bewegung, ohne Hast
III. Ruhevoll, poco adagio
IV. Sehr behaglich

※当初の発表から出演者の一部が変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

※本公演では日本テレビ「読響プレミア」の収録が行われます。

9/29 Wed.

第611回 定期演奏会
サントリーホール 19時開演
SUBSCRIPTION CONCERT No.611 / Suntory Hall 19:00

指揮
Conductor

チェロ
Cello
コンサートマスター
Concertmaster

ストラヴィンスキー
STRAVINSKY

ゴリホフ
GOLIJOV

[休憩]
[Intermission]

ショスタコーヴィチ
SHOSTAKOVICH

井上道義 -p.7
MICHIO INOUE

宮田 大 -p.9
DAI MIYATA

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

管楽器のための交響曲 [約12分] -p.18
Symphonies of Wind Instruments

チェロ協奏曲〈アズール〉(日本初演) [約25分] -p.19
Azul (Japan premiere)
I. Paz Sulfúrica
II. Silencio
III. Transit
IV. Yrushalem

アコーディオン: 大田智美
パーカッション: 海沼正利、萱谷亮一
音響: 有馬純寿

交響曲 第9番 変ホ長調 作品70 [約27分] -p.20
Symphony No. 9 in E flat major, op. 70
I. Allegro
II. Moderato
III. Presto
- IV. Largo
- V. Allegretto

※当初の発表から出演者の一部が変更されました。

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)
文芸春秋 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力: アフラック生命保険株式会社

指揮

鈴木雅明

MASAAKI SUZUKI, Conductor

古典派の巨匠が魅せる メンデルスゾーンの傑作



©Marco Borggreve

バッハ演奏の第一人者として名声を博す世界的指揮者。バッハとともに力を注ぐメンデルスゾーンの傑作をどのように描き出すのか、期待が高まる。

1954年神戸市生まれ。東京芸術大学およびアムステルダム・スウェーリンク音楽院に学ぶ。1990年にバッハ・コレギウム・ジャパン(BCJ)を創設。グループを率いて欧米の主要なホール、音楽祭にたびたび登場しており、雄弁かつ透明なサウンド、本質に迫る演奏アプローチで、極めて高い評価を積み重ねている。近年は海外のバロック・アンサンブルへの客演に加え、ニューヨーク・フィル、バイエルン放送響などを指揮し、活躍の場を国際的に広げている。ブリテン・シンフォニアとのストラヴィンスキー・プログラムが地元紙他各メディアで絶賛されたほか、BCJではベートーヴェンの〈ミサ・ソレムニス〉や〈第九〉、今年1月にはメンデルスゾーンの〈エアラス〉を取り上げるなど多彩なレパートリーを披露。

スウェーデンBISレーベルから数多くのCDをリリースし、特にBCJとの「バッハ: 教会カンタータ・シリーズ」は、数少ない全曲録音として世界的に注目を集めている。紫綬褒章、サントリー音楽賞、ドイツ連邦共和国功労勲章功労十字小綬章、バッハ・メダルなど多数受ける。現在、イエール大学アーティスト・イン・レジデンス、東京芸術大学名誉教授、オランダ改革派神学大学名誉博士などを務めている。

読響とは、2000年のバッハ〈マタイ受難曲〉(メンデルスゾーン版)、18年のメンデルスゾーン作品などで好評を博し、今年7月のミュゼ川崎でのロシア・プログラムも話題を呼んだ。

9/18
土曜マチネー

9/19
日曜マチネー

Maestro

9/24
名曲

Maestro

指揮

高関 健

KEN TAKASEKI, Conductor

名匠が奏でる
深遠なるマーラー
“天上の喜び”



©Masahide Sato

緻密なスコアの分析からスケールの大きな音楽を作る知性派指揮者。今回、読響主催公演に約12年ぶりに登場し、明晰なタクトと深い分析力でハイドンとマーラーの交響曲の神髄に迫る。

1955年東京生まれ。桐朋学園大学を卒業後、ベルリンでカラヤンのアシスタントを務め、タンゲルウッド音楽祭でもバーンスタイン、小澤征爾らに指導を受けた。日本のオーケストラはもとより、ベルゲン響、ウィーン響、オスロ・フィル、ベルリン・ドイツ響、ケルン放送響などに客演。2013年と17年にはサンクトペテルブルク・フィル定期演奏会を指揮、聴衆や楽員から大絶賛を博した。マイルスキー、パールマン、アルゲリッチ、ブーレーズら世界的ソリストや作曲家からも絶大な信頼を得ている。

これまで広島響音楽監督・常任指揮者、新日本フィル正指揮者、大阪センチュリー響常任指揮者、群馬響音楽監督（現・名誉指揮者）、札幌響正指揮者、京都市響常任首席客演指揮者などを歴任し、現在、東京シティ・フィル常任指揮者、仙台フィルレジデント・コンダクター、富士山静岡響首席指揮者、東京芸大音楽学部指揮科教授兼芸大フィル首席指揮者を務める。11年齋藤秀雄メモリアル基金賞、18年サントリー音楽賞などを受賞。

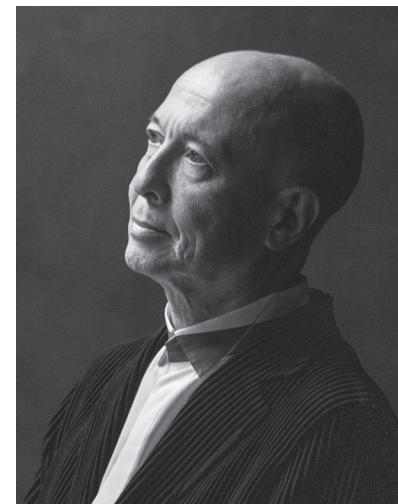
19年3月、ウラジオストクとサンクトペテルブルクで、『ロシアにおける日本年』の一環として團伊玖磨のオペラ『夕鶴』を指揮して、日本とロシアの文化交流に大きな役割を果たし、21年4月には新国立劇場でストラヴィンスキー『夜鳴きうぐいす』とチャイコフスキー『イオランタ』を指揮し、高い評価を得た。

指揮

井上道義

MICHIYOSHI INOUE, Conductor

“カリスマ”が振る
入魂のショスタコーヴィチ



©Yuriko Takagi

斬新な発想力と豊かな音楽性を誇り、圧倒的なカリスマ性を持つ鬼才。ショスタコーヴィチのスペシャリストとして世界的にも高い評価を受ける巨匠が、作品に込められた深い闇を炙り出す。

1946年東京生まれ。桐朋学園大学卒業。71年グイド・カンテルリ指揮者コンクールに優勝した後、世界的な活躍を開始する。これまで、ニュージーランド国立響首席客演指揮者、新日本フィル音楽監督、京都市響音楽監督、大阪フィル首席指揮者、オーケストラ・アンサンブル金沢音楽監督を歴任。また、シカゴ響、ハンブルク響、ミュンヘン・フィル、スカラ・フィル、レニングラード響、フランス国立管、ブダペスト祝祭管、KBS響、ベネズエラ・シモン・ボリバル響など世界一流のオーケストラに登場している。

2007年、日露五つのオーケストラとともに「日露友好ショスタコーヴィチ交響曲全曲演奏プロジェクト」を実施し、音楽・企画の両面で大きな成功を収めた。14年4月、病に倒れるが、同年10月に復帰を遂げる。17年の大阪国際フェスティバル「バーンスタイン：ミサ」を総監督として率い成功へと導き、19年にはオペラ『ドン・ジョヴァンニ』で既成概念にとらわれない舞台を作り、高く評価された。また、15年の全国共同制作オペラ『フィガロの結婚』（野田秀樹演出）では、総監督として10都市14公演の巡回公演を大成功させ、昨秋に再演された。

渡邊暁雄基金特別賞、東燃ゼネラル音楽賞、大阪文化賞、大阪文化祭賞、音楽クリティック・クラブ賞、有馬賞など受賞多数。読響とは近年、マーラーやブルックナーの作品やオペラなどで名演奏を繰り広げている。

9/29
定期

Maestro

9/18

土曜マチネー

9/19

日曜マチネー

Artist



©Marco Borggreve

オルガン

鈴木優人

MASATO SUZUKI, Organ

マルチな才能で新時代を切り拓く俊英。1981年オランダ生まれ。東京芸術大学および同大学院修了。オランダ・ハーグ王立音楽院修了。指揮者として国内外の楽団と共演するほか、ピアノやチェンバロ、オルガンなど鍵盤楽器奏者としても活躍している。13年から調布国際音楽祭のエグゼクティブ・プロデューサー。18年にバッハ・コレギウム・ジャパン (BCJ) 首席指揮者に就任。BCJオペラシリーズのプロデュースを務め、20年のヘンデル「歌劇〈リナルド〉」などがバロック・オペラの新機軸として高く評価され多くの話題を呼んだ。NHK-FM「古楽の楽しみ」にレギュラー出演中。齋藤秀雄メモリアル基金賞など受賞多数。今年3月に芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した。2020年4月から読響指揮者／クリエイティブ・パートナーを務めている。

透明感ある歌声と多彩な表現で注目を浴びるソプラノの新星。北海道教育大学岩見沢校卒業後、東京芸術大学大学院博士課程を修了。ジュリアード音楽院コンクール第1位など受賞多数。オペラではヘンデル〈リナルド〉のアルミーダ、モーツァルト〈魔笛〉の夜の女王、プッチーニ〈ラ・ボエーム〉のムゼッタなどを演じるほか、ベートーヴェン〈第九〉、マーラー〈千人の交響曲〉、シェーンベルク〈月に憑かれたピエロ〉のソロを務めるなど、古楽から現代音楽まで幅広いレパートリーを持つ。これまでにプラハ室内管、バッハ・コレギウム・ジャパン、新日本フィルなどと共演。モーツァルトのアリアを歌った初録音が18年『レコード芸術』誌の特選盤に選出された。読響とは、今年7月調布国際音楽祭でのメノッティ〈電話〉で共演し好評を博した。



©井村重人

ソプラノ

中江早希

SAKI NAKAE, Soprano



チェロ

宮田 大

DAI MIYATA, Cello

日本を代表するチェリストとして国際的に活躍する俊英。1986年宇都宮市生まれ。スイスのジュネーヴ音楽院卒業、ドイツのクロンベルク・アカデミー修了。2009年、ロストロポーヴィチ国際コンクールで日本人として初めて優勝。その圧倒的な演奏は、作曲家や共演者からの信頼が厚く、世界的指揮者・小澤征爾にも絶賛された。これまでに著名な指揮者や楽団と多数共演するほか、クレーメル、バシュメット、ヴェンゲーロフら名匠と共演。演奏活動の他、国際チェロ・コンクールの審査員としても招聘されている。メディアでも「ららら♪クラシック」「題名のない音楽会」「徹子の部屋」などへ出演。使用楽器は、上野製薬株式会社より貸与された1698年製A. ストラディヴァリウス“シャモニー”。読響とは2010年の初登場以来、数多く共演している。

9/29

定期

Artist

9/24

名曲

Artist

9/18

土曜マチネー

9/19

日曜マチネー

Program Notes

C. P. E. バッハ

シンフォニア ニ長調 Wq.183/1

カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ（1714～88）はヨハン・セバスティアン・バッハ（大バッハ）と最初の妻マリア・バルバラの間に次男として生まれた。「父親以外に音楽の師はいなかった」と語るエマヌエルは恵まれた教育環境に育ち、それぞれの地で名声を得たことから「ベルリンのバッハ」「ハンブルクのバッハ」と呼ばれた。ベルリンではフリードリヒ大王のもとで30年近くにわたり奉職し、その後、ハンブルクでは名付け親でもあるテレマンの後継者としてカントル職（教師兼音楽監督）に就いた。この職で音楽以外の科目を教える義務を免除されたエマヌエルだが、それでも職務は膨大で、教会での演奏やカンタータの作曲に追われたというから、父親の多忙なライブツィヒ時代を連想させる。

シンフォニア ニ長調 Wq.183/1は、そんな多忙なハンブルク時代の作品である。エマヌエル・バッハのシンフォニアはベルリン時代の作品が12曲、ハンブルク時代の作品が10曲残されており、本作品はプロイセン皇太子フリードリヒ・ヴィルヘルムに献呈された〈12のオブリガート声部のための4つのシンフォニア〉Wq.183に収められた一曲。それまでのシンフォニアがいずれも弦楽オーケストラのための作品であったのに対し、ここでは管楽器群が加わって豊かな響きを作り出す。初演時には「40名からなるハンブルクではかつてないほどの大人数のオーケストラが巧みに熱演した」と評された。

第1楽章 アレグロ・ディ・モルト 大胆に移り変わる感情表現や強弱の突然の変化など、エマヌエルならではの創意がほとばしる。

第2楽章 ラルゴ 漂泊するかのような簡潔な緩徐楽章。切れ目なく終楽章へ。

第3楽章 プレスト 陽気なフィナーレ。疾走するような楽想の間に挟まれる突然のブレーキ、強奏と弱奏のコントラストなど、パンチが効いている。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1775～76年／初演：1776年8月17日、ハンブルク／演奏時間：約11分
楽器編成／フルート2、オーボエ2、ファゴット、ホルン2、ティンパニ、チェンバロ、弦五部

プーランク

オルガン協奏曲 ト短調

1934年、オルガン愛好家でもあったエドモン・ド・ポリニャック公妃は「小オーケストラと易しいオルガン・パートのある作品」をジャン・フランセに委嘱した。フランセが断ったため、代わってフランシス・プーランク（1899～1963）がこれを引き受けて、異色の編成の協奏曲が生み出された。オルガンとティンパニと弦楽による協奏曲、つまり管楽器抜ききの協奏曲という編成には意表をつかれるが、発音機構からいえばオルガンは巨大管楽器。これで管・弦・打楽器が一通りそろっているともみなせる。プーランクは「オルガン協奏曲は宗教曲ではないが、教会でも演奏可能な編成にした」という。

作曲中のプーランクは、以前に同じポリニャック公妃のために書いた作品を引き合いに出して「2台のピアノのための協奏曲のような陽気なプーランクではなく、修道院に向かうプーランク」による作品だと述べて、その宗教的な性格を示唆している。しかし曲想は多彩で、ときに軽妙洒脱でときに敬虔真摯な作曲家の二面性がよく表われている。聖俗を自在に行き来するプーランクの面目躍如といったところだろう。

曲は切れ目のない7つの部分からなり、以下の3楽章構成とみることができる。

第1楽章 アンダンテ～アレグロ・ジョコーソ 荘重なオルガン独奏によるアンダンテに、はしゃぎ回るようなアレグロ・ジョコーソが続く。

第2楽章 アンダンテ・モデラート 内省的なオルガン独奏と柔和な弦楽合奏が重なり合う。葛藤を滲ませながら次第に緊迫感を高める。

第3楽章 テンポ・アレグロ、モルト・アジタート～レント～アレグロ～ラルゴ 性急で決然とした調子で始まった後、目まぐるしく表情を交錯させる。第1楽章冒頭のオルガン主題が力強く回歸した後、厳粛な面持ちで曲を閉じる。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1936年／初演：1939年6月21日、パリ／演奏時間：約24分
楽器編成／ティンパニ、弦五部、独奏オルガン

9/18

土曜マチネー

9/19

日曜マチネー

Program Notes

9/18

土曜マチネー

9/19

日曜マチネー

Program Notes

メンデルスゾーン

交響曲 第4番 イ長調 作品90 〈イタリア〉

1830年、フェリックス・メンデルスゾーン（1809～47）はイタリアへの大旅行に赴く。出発しようとした矢先、麻疹にかかって1か月の足止めを余儀なくされたものの、5月にベルリンを離れると、ワイマールでゲーテに会い、ミュンヘン、ウィーン他を経由して、10月にヴェネツィアに到着。さらにフィレンツェ、ローマ、ジェノヴァ、ミラノ、ナポリに滞在し、スイスを経由して翌1831年10月に帰国した。メンデルスゾーンはイタリア各地の芸術遺産と自然環境に深い感銘を受け、またローマでベリリオーズに面会するなど、音楽家や芸術家たちとの交流から刺激を受けている。

イタリア旅行で受けたインスピレーションをもとに、メンデルスゾーンは新たな交響曲に着手する。しかし作品はすぐには仕上がらず、完成は1833年になってから。作品には旅先で目にした芸術や自然のみならず、個人的な体験やイタリア人たちの生命力から得た印象などが凝縮されているという。初演は好評を博し、以来、メンデルスゾーンのもっとも人気の高い交響曲となっている。

第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ 弦のピッツィカートの一撃と木管楽器の軽快な刻みに乗って、ヴァイオリンのはじけるような主題が勢いよく登場する。イタリアの陽光と青空はかくもと思わせる晴れやかさ。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート うすすらと愁いを帯びた調子で、淡々と歩みを進める。チェコ出身の作曲家モシェレスによれば、チェコの巡礼歌が用いられているという。

第3楽章 コン・モート・モデラート メヌエット風だが、リズムカルというよりは流麗で、舞曲の性格と歌謡風の性格を併せ持つ。中間部はひなびたムード。

第4楽章 サルタレッロ、プレスト ローマやミラノで大流行した民俗舞曲サルタレッロを取り入れ、たたみかけるようなリズムに乗って熱狂的な幕切れを迎える。

〈飯尾洋一 音楽ライター〉

作曲：1831～33年／初演：1833年5月13日、ロンドン／演奏時間：約27分

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

ハイドン

交響曲 第22番 変ホ長調〈哲学者〉

オーボエ族の楽器で、オーボエよりも完全5度低い音が出る「コーラングレ」（イングリッシュ・ホルン）。フランス語で「イングランドのホルン」の意味だが、この楽器が発明されたのはイングランドでもフランスでもなく、1720年頃、オーストリア領ブレスラウ（現ポーランドのヴロツワフ）でとされる。コーラングレがオーボエの低音域を補強する楽器としてオーケストラ内で積極的に用いられるようになったのは19世紀、ロマン派の時代以降のことだが、18世紀にも使用例がなかったわけではない。ヨーゼフ・ハイドン（1732～1809）がこの楽器に着目したのは1750年頃であったが、1764年に作曲された交響曲第22番変ホ長調において、オーボエ2本をこのコーラングレに置き換えたのは、後の例に照らしても相当思い切った決断であった。

1761年より副楽長として勤め始めたばかりのエステルハージ侯爵家では、翌62年に当主パウル・アントンが没し、弟のニコラウスに代替わりした。新しい当主の求めに応じ、週2回開催されるアカデミー（演奏会）のために新作を披露し続けねばならない作曲家・音楽家としての日常は、相当に忙しかったに違いない。先代に比べて派手好みであり、音楽のわかりやすさを重視したニコラウスの意に添うべく、ハイドンはさまざまな趣向を凝らした曲を作る必要に迫られていた。

緩—急—緩—急による4つの楽章は、両端楽章に規模の大きな楽曲を置く古典派の交響曲とは異なる、後期バロック期の教会ソナタの特徴を引き継いだものである。第2楽章、第4楽章双方にもっとも速い速度指示（プレスト）が指定されることで、ゆったりと構えるアダージョの第1楽章、メヌエットの第3楽章との対比が際立っている。〈哲学者〉というニックネームの由来は明らかではないが、第1楽章の沈黙思考する様子を描いたかのような音楽、そして落ち着いたコーラングレの響きは、たしかに哲学者の醸し出すオーラを表現してあまりある。

〈広瀬大介 音楽学・音楽評論〉

作曲：1764年／初演：不詳／演奏時間：約16分

楽器編成／イングリッシュ・ホルン2、ファゴット、ホルン2、チェンバロ、弦五部

マーラー

交響曲 第4番 ト長調〈大いなる喜びへの賛歌〉

ウィーン宮廷歌劇場指揮者としての激務の合間に作曲され、1901年11月にミュンヘンで初演されたグスタフ・マーラー（1860～1911）の交響曲第4番。ウィーンでの辛辣な評を避ける意図もあっただろうが、好評とは言えずに終わる。マーラーは前作交響曲第3番の第7楽章に、歌曲集〈少年の魔法の角笛〉の“天上の生活”を置くつもりだったが、次の交響曲の最終楽章にこの曲を使うことに決め、先行する3つの楽章が後から付け足された。

第4番までの交響曲は同時期に書き進められていた歌曲、とくに〈少年の魔法の角笛〉との関連が強い。さらに、この時期のマーラー作品における交響詩と交響曲の違いも曖昧で、標題はつけたり外されたりを繰り返す（最終的にはほとんど外された）。交響曲・交響詩や歌曲といったジャンル分けという発想が希薄であったマーラーにとっては、そのすべてが、自身が表現しようとするマクロな音楽世界そのものであっただろう。

第1楽章冒頭で響き渡る鈴（マーラーは「道化の帽子についた鈴」と考えた）を伴う旋律は、最終楽章で主に歌詞の間奏として頻繁に用いられている楽器である鈴を用いて、統一感を与えようとしたのだろうか。**第2楽章**では、「死の舞踏」（調弦を変えたヴァイオリン・ソロが活躍）を模したレントラー（オーストリア民謡）の旋律が響き、**第3楽章**の変奏曲では、変奏部分のあわただしく、そしてアイロニカルな響きが、曲全体に不安感を与える。これは後半の壮大なファンファーレと見事な対照をなしており、未完に終わったブルックナーの交響曲第9番第3楽章と同様、この楽章が全体の終結部のようにも聞こえる。エピローグ的に置かれた**第4楽章**“天上の生活”の歌詞では、聖ヨハネの仔羊（イエス・キリストのこと）にヘロデが目をつけ、それを天使たちが屠ってしまう様子が描かれる。天国のほのぼのとした様子のうちにも、鋭い皮肉とパロディが満ちている。〈広瀬大介 音楽学・音楽評論〉

作曲：天上の生活（第4楽章）：1892年、第1～3楽章：1899～1901年／初演：天上の生活（第4楽章）：

1893年10月27日、ハンブルク 全曲：1901年11月25日、ミュンヘン／演奏時間：約55分

楽器編成／フルート4（ピッコロ持替）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（バスクラリネット、エスクラリネット持替）、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、トライアングル、グロッケンシュピール、銅鑼、鈴）、ハープ、弦五部、ソプラノ独唱

マーラー／交響曲 第4番〈大いなる喜びへの賛歌〉

第4楽章 歌詞対訳

Wir genießen die himmlischen Freuden,
drum tun wir das Irdische meiden.
Kein weltlich Getümmel
hört man nicht im Himmel!
Lebt alles in sanfterster Ruh.
Wir führen ein englisches Leben!
Sind dennoch ganz lustig daneben.
Wir tanzen und springen,
Wir hüpfen und singen,
Sankt Peter im Himmel sieht zu.

Johannes das Lämmlein auslasset,
der Metzger Herodes drauf passet,
Wir führen ein geduldig's,
unschuldig's, geduldig's,
ein liebliches Lämmlein zu Tod!
Sankt Lukas, der Ochsen tät schlachten
ohn' einig's Bedenken und Achten,
der Wein kost' kein' Heller
im himmlischen Keller,
die Englein, die backen das Brot.

Gut Kräuter von allerhand Arten,
die wachsen im himmlischen Garten,
Gut Spargel, Fisolen
und was wir nur wollen!
Ganze Schüsseln voll sind uns bereit!
Gut Äpfel, gut Birn und gut Trauben,
Die Gärtner, die alles erlauben.
Willst Rehbock, willst Hasen,
auf offenen Straßen
sie laufen herbei!

天の喜びを 味わう我ら
憂き世のことは 忘れるに限る
世の喧騒は
天には 届かぬ
安らかな静けさの中 暮らすのだ
その生活は 天使のようだが
まったく 愉快きわまりない
踊り 跳びまわり
飛んでは 歌う
天のペテロ様が それを見る

ヨハネ様は 仔羊を放し
肉屋のヘロデは 虎視眈々
われらは この慈悲深き
穢れなき かわいい仔羊を
死へと追いやるのだ
ルカ様は 少しもためらわず
雄牛を 屠る
天の 酒蔵にある酒は
びた一文も かからない
パンを焼くのは 天使たち

天の庭に 生い茂るのは
ありとあらゆる 美味なる野菜
アスパラガスに いんげん豆
何でも お望みのままに
皿に山盛り 供される
リンゴ 洋ナシ ブドウも
庭師が すべてくれるのだ
シカや ウサギも
あちらの ほうから
大路を 走って駆けつける

Sollt' ein Festtag etwa kommen,
alle Fische gleich mit Freuden
angeschwommen!
Dort läuft schon Sankt Peter
mit Netz und mit Köder
zum himmlischen Weiher hinein,
Sankt Martha die Köchin muß sein.

Kein Musik ist ja nicht auf Erden.
Die unsrer verglichen kann werden,
Elftausend Jungfrauen
zu tanzen sich trauen!
Sankt Ursula selbst dazu lacht!
Cäcilia mit ihren Verwandten,
sind treffliche Hofmusikanten.
Die englischen Stimmen
ermuntern die Sinnen,
Daß alles für Freuden erwacht.

肉を 断たねばならぬ日は
魚のほうか やってくる
あそこを走るは ペテロ様
網と餌を 手にとって
天の池へと 踏み入るところ
料理は マルタ様に違いない

音楽も 地上のそれとは
比較にならぬ 素晴らしさ
踊り回るは
無数の乙女
ウルズラ様も 笑い出す
見事な音楽を 奏でるは
楽師を従えた ツェツィーリア様
天使たちの 歌声に
心は 勇気づけられ
すべてが歓びに 目覚めるのだ

(訳：広瀬大介)

ストラヴィンスキー 管楽器のための交響曲

今年没後50年のロシア出身のイーゴル・ストラヴィンスキー（1882～1971）は、メシアンから「カメレオン作曲家」と言われたように、時代ごとに作風を大きく変えていった作曲家である。1910年代の三大バレエに代表される強烈なリズムが特徴の原始主義から、第一次世界大戦後は新古典主義へとゆるやかに移行するが、〈管楽器のための交響曲〉は、その転換期に書かれた。

1920年、フランスの音楽雑誌『ルヴュ・ミュージカル』は、ドビュッシー（1862～1918）追悼特別号刊行に際して、デュカス、ルーセル、ラヴェル、サティ、バルトークら10人の作曲家に楽曲の寄稿を依頼した。ストラヴィンスキーもその依頼を受けたひとり。同年12月刊行の特別号にはピアノ譜によるコラールが掲載され、「管楽器のための交響曲の断章、C. A. ドビュッシーの思い出に」と献辞が添えられた。これは、楽曲終結部のコラールをピアノ用に編曲したもので、その作曲についてストラヴィンスキーが『自伝』のなかで、「私は終わりから始めた」と書いているように、全体はこの哀悼のコラールを出発点として作られた。

タイトルに交響曲とあるが、伝統的な多楽章の楽曲ではなく、「共に鳴り響く」という意味の単一楽章の小品である。導入部は、小節ごとに拍子が交替しながらクラリネットが甲高い音色で跳躍し、続いて全楽器が重たい和音を奏する。クラリネットの旋律とコラール風の進行はその後もたびたび現れ、主部はストラヴィンスキー好みのロシア民謡風の旋律がフルートで歌われるところから始まる。各楽器のソロが活躍しながら進められ、後半は律動的な運動が肅然とした和音へ、激しさから静けさへと移り、コラールによって「厳粛な祭典の儀式」（ストラヴィンスキー）は結ばれる。初演はクーセヴィツキーの指揮によりロンドンで行われ、大戦後、楽器編成も含めて改訂（1947年版）、アンセルメの指揮で初演された。本日は改訂版で演奏される。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1920年、改訂：1945～47年／初演：1921年6月10日、ロンドン 改訂版初演：1948年1月31日、ニューヨーク／演奏時間：約12分
楽器編成／フルート3、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、ファゴット3（コントラファゴット持替）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ

ゴリホフ チェロ協奏曲〈アズール〉（日本初演）

ウクライナとルーマニアのユダヤ系移民の子孫で、アルゼンチンのラプラタに生まれたオスバルド・ゴリホフ（1960～）は、学生時代をイスラエルで過ごし、1986年にアメリカに移住した。タングルウッドでオリバー・ナッセンに師事し、90年代からクロノス・カルテットと交流を深め、ミレニウム以降は映画音楽でも知られる。彼の音楽は、前衛やミニマル、タンゴやクレズマー（東欧ユダヤ人の民謡をルーツにもつ）やロマの音楽、中東の伝統音楽など、多様な要素が絡み合う。

チェロ協奏曲〈アズール〉は、2006年にボストン交響楽団の委嘱で、チェロのヨーヨー・マのために作曲された。チリの詩人パブロ・ネルーダの代表作「マチュピチュの高み」などから着想を得て書かれ、タイトルの「アズール」は、スペイン語で青を意味する。それは、作曲者によれば、郷愁を誘うタングルウッドの夕暮れの空や、宇宙から撮影した青い地球のイメージとも重なる。独特の音響と質感をもつ音楽で、アコーディオンが存在感を示し、多彩なラテン系の楽器を含む打楽器群、すなわちゴリホフの言う「21世紀の通奏低音」は、バロック時代と同様に即興も許されている。

全体は、第2楽章を中心に、切れ目なく演奏される。**第1楽章「硫黄の平和」** 大地のエネルギーを伝えるオーケストラから、鳥が羽ばたくように独奏チェロのノスタルジックな主題が現れる。**第2楽章「沈黙」** 独奏チェロが長く保持する音の合間に鳥の声やきらきらと輝く響きが現れ、後半は、弦楽器の規則的な刻みを背景に高まる。**第3楽章「推移」** 独奏チェロのアルペジオが延々と続く。**第4楽章「エルサレム」** トロンボーンに楽曲冒頭の主題が現れ、様々な楽器で反復された後、独奏チェロで歌われる。終結部「パルサー」と「流星」の演奏についてゴリホフは、「ルイ・アームストロングが天馬に跨る感じ」と指示した。 〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：2006年／初演：2006年8月4日、タングルウッド 改訂版初演：2007年7月31日、ニューヨーク／演奏時間：約25分
楽器編成／フルート3（ピッコロ持替）、イングリッシュ・ホルン、クラリネット、バセットホルン、ファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、打楽器（ヴィブラフォン、シンバル、銅鑼、トライアングル、ゴートネイル、スプリング、カシーシ、シェーカー、マリンバ、ゴング）、ハープ、チェレスタ、アコーディオン、弦五部、独奏チェロ、独奏打楽器2 ※作曲家の指示に従い、一部アンプ（音響機器）を使用しています。

ショスタコーヴィチ

交響曲 第9番 変ホ長調 作品70

ドミトリー・ショスタコーヴィチ(1906～75)の交響曲第9番は、1945年7月末に着手され、1か月ほどで書き上げられた。20世紀を代表する交響曲作曲家であるショスタコーヴィチは、レニングラード音楽院の卒業作品の第1番(1925)から最晩年の第15番(1971)まで46年間にわたって交響曲を書き続け、第2次世界大戦中も、ソ連の輝かしい勝利を確信させる第7番(1941)が、戦時下にもかかわらず国内の至るところで演奏され、第8番(1943)には、戦争の悲惨な現実が映し出された。終戦直後に完成した第9番は、これら「戦争三部作」を完結させる作品であり、いかなる作曲家も意識せざるを得ない「第九」でもあり、初演前から大きな注目を集めていた。

しかし、発表された作品は、交響曲というよりディヴェルティメントに近く、ベートーヴェンよりもハイドンやモーツァルトに通じる軽妙な音楽で、ユーモアや風刺がちりばめられていた。ショスタコーヴィチは当初、「祖国の勝利とロシア国民の偉大さに捧げる合唱付きの交響曲」と公言していたものの、その構想は破棄され、彼の交響曲のなかでも単一楽章の第2番(1927)に次いで短い作品となった。1945年11月3日にムラヴィンスキー指揮のレニングラード・フィルハーモニー交響楽団によって初演され、第3楽章からフィナーレまでがアンコールで演奏され、好意的に受け入れられた。だが、当局からすれば、戦勝の最大の功労者スターリンを讃える楽曲のはずが肩透かしにあったようなもの。批評家からも「これまで書かれた交響曲の中で最も交響曲的でない」など非難の声があがった。その結果、彼はスターリンの信任を受けて文化政策を統率していたジダーノフに目をつけられ、3年後の1948年の形式主義批判、いわゆる「ジダーノフ批判」の標的にされる。同年2月、モスクワ音楽院とレニングラード音楽院の両教授職を突然解任され、全作品が演奏禁止となり、ショスタコーヴィチは苦境に立たされるのだった。

全体は、5つの楽章から構成され、第8番と同じように、第3楽章以降は切れ目なく演奏される。「第九」のプレッシャーからパロディーでやり過ごそうとしたのか、それともスターリン崇拜への風刺なのか、その真意は不明である。

第1楽章 アレグロ、変ホ長調 ソナタ形式。弦楽器による軽やかな第1主題で

始まり、トロンボーンを合図に行進曲風のリズムにのってピッコロの第2主題が現れ、提示部はそのまま反復される。この杓子定規な反復こそ、古典派ソナタ形式のパロディー。派手な展開部を経て、再現部は第1主題の後、トロンボーンが合図するもなかなか第2主題が現れず、ようやくヴァイオリンで、しかも主調ではなく下屬調(変イ長調)で再現される。

第2楽章 モデラート、口短調 叙情的な緩徐楽章。クラリネットのメランコリックな主題が静かに広がり、弦楽器を加えた部分は心がざわめく。

第3楽章 プレスト、ト長調 無窮動のスケルツォ楽章。クラリネット・ソロの澀刺とした主題で始まり、滑るように進行するエピソードが続く。中間部ではトランペット・ソロのスペイン風の勇壮な旋律が高らかに響く。

第4楽章 ラルゴ、変口短調 終楽章への導入的な役割をもつ短い楽章。3本のトロンボーンとチューバの威圧的なファンファーレに続いて、ファゴットが高音域で嘆きの歌を歌う。ファンファーレが繰り返され、ファゴットは低音域に沈む。

第5楽章 アレグレット、変ホ長調 ソナタ形式。前楽章から残った悲痛なファゴットは一転、道化に転じてユーモラスな表情の第1主題を提示する。オーボエから始まる木管楽器の第2主題もアイロニーに満ちている。弦楽器の新しい主題も加わり、第1主題と同時に展開させたり自由自在。次第にエネルギーは高められ、凱行進曲風な壮大さで盛り上がり、最後(アレグロ)は、弦楽器と管楽器が交替しながら、あっさりと駆け抜けていく。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1945年／初演：1945年11月3日、レニングラード／演奏時間：約27分

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、小太鼓、シンバル、タンブリン、トライアングル)、弦五部